

アーカイブ 通信 No.24

No.24

2022.3.1

◆編集・発行：

ネットワーク・市民アーカイブ

◆tel: 042-540-1663 (事務局)

※事務局は3月上旬に移転し、電話番号も変わります。

tel・fax: 042-536-5535 (市民アーカイブ多摩)

www.c-archive.jp

◆正会員 1 口 6,000 円、賛助会員 1 口 3,000 円 / 年

ゆうちょ銀行 振替口座 00120-9-729226

口座名：市民アーカイブ ※団体会員 2 口～

□市民アーカイブ多摩が あること

環境アーカイブズと市民アーカイブ多摩は、特別な関係で結ばれた施設です。

1972年から2002年まで、東京都立多摩社会教育会館市民活動サービスコーナーで収集された市民活動団体のミニコミなど約500箱が、2011年、市民活動資料・情報センターをつくる会（「つくる会」）から法政大学サステイナビリティ研究教育機構の環境アーカイブズ資料公開室に寄託されました。13年、環境アーカイブズ資料公開室は、大原社会問題研究所に移管されて環境アーカイブズとなり、15年、資料群は寄託から寄贈に切り替えられました。

環境アーカイブズが資料公開室時代に収集した資料の箱数は約850箱です。旧サービスコーナーの資料群は、

市民活動資料を 継承し続けるための 市民の営み

「環境アーカイブズと市民アーカイブ多摩の
異質で、濃密な関係」

山本唯人（法政大学大原社会問題研究所・環境アーカイブズ）



箱数にして室全体の半分以上を占め、この資料群がなければ、現在の環境アーカイブズはなかったと言えます。

「つくる会」は、旧サービスコーナーが収集した貴重な資料を散逸させないため、「資料センター」をつくることを目指して06年に設立されました。約500箱の行先を確保したことで終わらず、02年に以降に収集した資料を、14年に開館した市民アーカイブ多摩で保管・公開することになり、「つくる会」の後継団体である「ネットワーク・市民アーカイブ」によって運営されています。

こうした経緯から、「多摩の市民活動」に関する資料は、72年～02年までを所蔵し、大学が運営する「環境アーカイブズ」と、02年以降を所蔵し、民間団体が運営する「市民アーカイブ多摩」という2つの並

開館 8 周年記念集会

一枚のビラから ～ 現場から発信することば ～

6月5日(日)午後1時30分～

会場：たましん RISURU ホール5階 第1会議室

講師：松野哲二 さん(チマ・チョゴリ友の会／府中緊急派遣村)

・要申込み ・参加費 500 円(会員無料)

「ビラが、ぼくの名刺」と言う松野哲二さんのバッグには、いつもビラや通信、リーフレットや新聞の切り抜きなどがあふれている。

初めてビラを手にしたのは中学生の時、全国学力テストに反対するビラだったそうだ。ベトナム反戦のビラをつくった高校時代、「活動家」にひそむ権威主義を批判した大学時代のビラ、三里塚闘争、職場のいじめ問題、朝鮮学校の子供もたちへの暴言や暴力、東日本大震災、コロナ禍の困りごと相談…さまざまな問題や社会矛盾にであうたび、その現場から、自分のことばを発信してきた。松野さんの思いを聞き合いたい。

存する施設を中心に、収集・整理・保存・公開が進められています。

私は、20年4月、環境アーカイブズ担当教員として着任し、さまざまな市民活動資料の現実を目の当たりにするなかで、資料が寄贈されたあとも、それで活動が終わらず「市民アーカイブ多摩」ができたこと、寄贈先と寄贈元の組織が「並存」し、活動が続いていることには、単に「資料の時期」が重なっている以上に、もっと深い、現代的な意味があると考えています。

□文脈情報の収集

文書が所蔵資料の大半を占めるアーカイブズでは、資料

群の作成から公開に至る経緯を示す「文脈情報」の把握が重視されます。

基本的にその1冊に必要な情報が網羅され、それゆえ、1冊ずつ持ち運んでも理解の前提が崩れない図書と違って、膨大な紙資料からなる文書において、そのなかの1枚だけをとり出しても、情報を適切に読み取ることができません。

従って、アーカイブズでは、基本的にその資料の元の並びを重視し、一旦順序を決めたら動かさないことが原則です。資料は1枚で扱わず、資料の全体——「資料群」として管理します。さらに、その文脈に関する情報を、資料

群概要などの書類にして明示し、利用に供します。

ところが、市民の自発的な活動を根底に置く市民活動資料には、この「文脈情報」が把握しづらいという特徴があるように思います。

正確には、資料の作成や取捨、保管のルールが明文化されていないために、活動と資料が切り離されると、文脈の把握が際立って難しくなるということです。

例えば、環境アーカイブズにサリドマイド事件関係資料という資料群があります。その目録の公開に当たって、寄贈者にチェックをお願いしたところ、ある団体の性格が「支援団体」ではなく、「被害者団体」であることが分かり、資料編成を修正できたということがありました。

ある団体が、支援団体が被害



ミニミを配架した環境アーカイブズ
書庫の資料棚

者団体かは、その資料を収集した本人が見れば瞬時に分かることです。しかし、活動から一旦「切れて」いる整理者にとって、個別具体の団体名から、その性格を把握し確定するには、膨大な時間がかかります。あるいは、多くの市民活動資料は、目的が達成するまでの一時的利用を想定し、その都度、自分たちのために作られるので、「資料だけ」から読み取れる情報が限定されているとも言えます。

付け加えると、文脈の把握が難しい場合に、原則として「資料に書かれたこと」を基礎にするという手続きそのものは妥当なものです。ただし、明示的に書かれていない情報が多いので、「資料だけ」にこだわって文脈を読もうとすると、結果的に「分からない」が増え、しまつたり、資料から推定した文脈と「事実」の間に違いが生じる可能性が高くなるということです。

ここには、資料から目録作成を進める際の、手続的な「正しさ」と、現実を反映しているという意味での「正確さ」の違いということ——わたしたちが「正確な情報を発信する」と何気なく言うときの、「正確さ」とは何かというきわめて現代的な問題が潜んでいます。

□ 文脈を討論しあえる意味

こうした市民活動資料の困難を見つめていくと、活動が資料を寄贈したことで終わらず、その先の資料を収集しながら活動を続けていくことは、巨大な可能性を秘めた挑戦として浮かび上がってきます。

環境アーカイブズは、当事者ではないアーカイブズ機関として、原則、「資料に書かれたこと」を基に目録を作成し、情報を発信します。一方、旧市民活動サービスコーナーに蓄積された有形無形の知識・資産を引き継ぎ、今も更新を続ける「市民アーカイブ多摩」の目で、その情報を批判・吟味していただける環境があることは、環境アーカイブズが発信する情報の正確さや、組織としての健全さ、活力などを担保するインフラとして、何にも代えられない価値があります。

やはりアーカイブズの主役は「資料」にあります。今後は資料そのものにもっと目を向けて、「1970年代以降・多摩の市民活動」という文脈を、環境アーカイブズの知見と市民アーカイブ多摩に蓄積された知識の濃密な突き合わせ、対話的討論を通じて明らかにすることが、この資料群を継承する鍵になるのではないかと考えています。

□ 雑色的であること

同時代の資料保存機関を見渡して、活力ある活動が展開できている場に共通する特徴の1つとして、その場が雑色的であることが、挙げられると思っています。

雑色的とは、その場が1つの色で塗りつぶされていないこと。さまざまな立場や機能の担い手が、その場を往来し、自らを問い返す会話が常に起きていることです。

例えば、昨年12月、長崎で開催された公害資料館ネットワークのフォーラムに参加して、雑色的だと思える体験をしました。

公害の被害者やその支援に責任を持つ行政、大学所属の教員や個人の研究者、資料の公



市民アーカイブ多摩を訪問した
環境アーカイブズスタッフ

開を旨とするアーカイブズ、展示・教育が軸となる博物館、ネットワークを受け持つ財団職員など——それぞれ何かに長けていますが、何かは足りていない個人や団体が集まって2日間、熱い討論を交わします。

こうした多様性こそが、経験を継承するインフラとして不可欠であることは、ネットワークの端緒になったあおぞら財団の「公害博物館（仮称）」構想のなかで、過去の出来事を「体系的、総合的に知ることができる機能」の大切さとして理論化されてもいます（『環境と公害』第50巻第3号、21年1月、「公害資料館の現代的意義と課題」特集の各論考を参照）。

すぐそばにファイルの背中に眺めながら、声の届く場所にスタッフがいて、テーブルを囲んで語り合える市民アーカイブ多摩には、こうした活力あるアーカイブズに不可欠な雑色性が保たれています。その場の空気感こそが、一旦失われてしまえば2度と取り戻すことのできない市民の歴史的財産であることを共有できたと、環境アーカイブズと市民アーカイブ多摩という場の並存を、継承のプロジェクトへと変容させる連携のアイディアが開けてくるのではないかと思っています。

市民アーカイブ多摩が所蔵する、団体や個人が発行する会報・通信（ミニコミ）を、発行者の方に紹介していただきます。

2013年9月から、「どこで、どのような医療・介護があれば自分らしい身仕舞ができるか。それを自分で組み立てていく力を持ち合おう」と歩んできました。くにたち豊かな老後をつくる会」20年の活動を土台に、人生の終末周辺に焦点を当てて再スタートしたのが「在宅ケアを考える会」です。

『通信』は、月1回の例会を振り返り、内容を共有して次につなげるために、例会後早めに発行。手配りで届けながら会員の様子を

感じていきます。会員のほとんどが高齢ですが、それぞれ不具合を抱えながらも学びたい、人とつながっていたいという強い思いを大事に、話の流れが理解しやすいよう、大きめの手書き文字で発行しています。

く、会員が中心。誤解なく読んでもらえるという信頼があるため、踏み込んで文が書け、その後のやりとりが励みになっています。

行政に対しても、市民の意見を『通信』を介して届けることで、無責任にならぬよう心がけています。

今年度は、国立市の認知症の取り組みの10年と市民のつかんできた内容を突き合わせ、認知症を自分ごととして受けとめていける助けになる内容を載せました。また、在宅ケアの強い味方の「看護小規模多機能居宅介護」についての学習会の様子、実

「浅川地下壕の保存をすすめる会」は、JR中央線高尾駅南側の山麓にある中島飛行機浅川地下工場跡の保存と公開を目的に1997年11月に設立され、今年で25年を迎える団体です。

会報「Peace あさかわ」は、年4回（6・9・12・3月）発行し、8ページで、全ページカラーです。設立の翌12月に第1号を創刊し、2021年12月に133号を発行しました。年数と号数が合わないのは、当初は年6回発行

際に在宅看取りに伴走してみえた在宅死のありようの一例を掲載しました。

地域の在宅医師の参加やアドバイスも、話し合いに厚みをもたらしています。

親を在宅で看取り、できることなら自分もと願いつつも、介護・医療の仕組みや家族の形も刻々変化する中で、何度も自分の身仕舞の絵を描き変える必要に迫られています。

会の活動も、1つひとつを見つめる方向に変わってきました。互いの姿から学び、仲間と共にできるところまで続けようと思っています。

2013年創刊、80部、A4判、4～8頁、
月1回発行
連絡先：042-575-9219（山本）
当館所蔵：1号（2013.9.20）～
77号内容＝「第10回国立市認知症
の日」（基調講演・シンポジウム・VTR
上映内容と会メンバーの感想）、会員
間で話し合ったこと、「なぜデイサー
ビスに行かなきゃいけないの？」に応
えられますか？、今後の例会予定

していたためです。200部を

ネット印刷し、
会員約100
名、報道関係、
図書館をはじめ
とする八王子

市役所の関係部署など合計約120部を郵送しています。戦争遺跡の保存を目的とした団体で、四半世紀にわたりカラー版

（最初はモノクロ。長年、家庭用プリンターで時間をかけて印刷をしていました）で発行している団体は数少ないと自負しています。内容は会の活動・調査報告をはじめ、地下壕に関するトピックスや新発見、戦争遺跡のレポート、論考などで、写真を使ったビジュアルな編集も、心がけています。

最近、団体の会報はメールなどの配信にし、紙媒体から離れつつあるといえます。紙での発行に驚く方もいます。本会のＨＰでは、月１回実施している地下壕見学会の案内と申込みを受付けており、見学会の開催はＨＰなくしてはできません。第１号からの会報はすべてＨＰで公開し、最新号の１３３号もすでにＨＰで読

- ・ 1998 年創刊、200 部、A4 判、8 頁、年 4 回発行
- ・ 会費(1 口)：2000 円／学生 500 円
- ・ E-mail：shpqy494@ybb.ne.jp (齊藤勉)
- ・ 当館所蔵：1 号(1997.12) ～

▽ 133 号内容＝総会記念講演会報告(昌子住江さん)、
浅川地下壕見学会アンケート結果、事務局だより他

むことができます。HPは便利で、多くの方に会の活動を知ってもらうことができるのに対して、紙での発行には手間と費用がかかり、編集担当はそれにかかりきりになります。しかし、本会の会員は紙媒体になじんだ年齢層の方が多く、行政へのPRなども考えた時、紙での発行を止めようという話はありません。その分、会報が会費に見合った内容なのか、その充実がいつも求められていると感じています。戦争遺跡である浅川地下壕を文化財として位置づけ、戦争の惨禍を語るモノとして後世に伝えるため、会報は活動の報告だけでなく、資料としても利用できるものと考え、て編集に当たっています。

(3)アーカイブ通信 No.24 2022 年 3 月 1 日

第7期 緑蔭トーク報告

第4回 9月25日

橋本義夫とふだん記

— 探求と記録の生涯 —

鈴木清隆

(ネットワーク・市民アーカイブ)

橋本義夫は1902

(明治35)年、5人きょうだいの次男として生まれ、85(昭和60)年に逝去、83年の生涯であった。生家は現在の八王子市檜原町。父・橋本喜市は農業兼土木業で南多摩郡会議員、東京府会議員も務めた。母・橋本春子は水車による撚糸業を起こした事業人で、目の不自由な人びとの「ごぜ宿」であった念西庵に食べ物運び、風呂などを提供するという人望のあつた人だった。

□ 吃音に悩む文学青年

義夫は、川口川流域にある陶器小学校、川口高等小学校に通った後、青梅の東京府立農林学校に進学し、3年間の寄宿舎生活を送っている。農林学校時代は、吃音に悩まされながら白樺派の文学書を中心に読書に没頭し、トルストイ作品、有島武郎、武者小路実篤作品を愛読した。後に賀川豊彦、内村鑑三の講演や著書を通しキリスト教理解を深めている。「小学校以来、学校や教師を一度も好きになれ

なかった」と述べているが、「寄宿舎での友人との交流は貴重であった」とも記録している。

□ 探究の人

義夫の探求は内面

と社会改革の二方向に向かっていた。「自分はどう生きたらよいのか」、そして「どうしたらよりよ



い社会にできるのか」の問題に悩む。いずれの探求も激しく徹底しており、内面の探求では、先の見えない厭世観に苛まれ、死ぬことを実行しようとして試みるほどのつきつめ方であった。特に重い厭世観に3度苛まれ、死ぬために山林や海辺をさまよっている。

他方、いったん着手した社会改革の活動は、経済的な困窮や

周囲からの非難などの問題が生じたとしても、諦めることはなかった。橋本の軌跡をたどると、内面と社会改革の探求の時期が区切られ、交互に現れている。私はその状態を厭世期と活動期と名づけて区別している。

□ 厭世期を経た後の活動期

第1期は19〜22歳頃までの厭世期を脱して、生家近くにある念西庵を使って村の若者と日曜学校、読書会を企画し、さらに村での青年禁酒等の悪習打破や生活改善の運動、農村図書館運動を進めた活動期。

第2期は29〜33歳頃までの厭世期を脱して、教育科学研究会の教育学者を八王子に招いて、学校給食運動や農繁期託児所開設を展開した活動期。

第3期は43〜47歳頃までの厭世期を脱して、自宅を事務所として「地方文化研究会」を立ち上げ、地方文化と人材の発掘にとりかかる。その成果を約15基の石碑、数十冊の地方文化記録として実現させる展開を目指した活動期。この時の記録は著書や石碑に結実しているが、厭世期についてもメモ、日記、手稿の形で克明な記録が遺されている。

□ ふだん記運動

ふだん記運動の発生は1958年、56歳の橋本が「ふだんぎの会」をつくり、回覧誌「ふだんぎ」を発刊した時点までさ

今年も開催！ 第8期 緑蔭トーク

◆ 第1回 4月23日(土)

近年の「若者」の社会運動

— SASPL, SEALDS, —

「辺野古」県民投票を事例に

元山仁士郎さん

(一橋大学大学院博士課程、

「辺野古」県民投票の会元代表)

◆ 第2回 5月28日(土)

地域に根差した学びと活動

— 八王子市浅川地域を中心として

奥田さき子さん

(元・浅川地区社会教育推進委員会委員)

◆ 第3回 6月25日(土)

いのちを活かせビジュアル資料

— 戦前・戦中の映像よみとときの経験から

中村光一さん(NHK元職員)

◆ 第4回 9月24日(土)

養沢からのたより

— 林業の現在とそらあけの会

池谷キワ子さん・岡田誠さん

(そらあけの会)

・会場：市民アーカイブ多摩

(立川市幸町5の96の7 8頁地図)

☎042(536)5535

・時間：午後4時15分〜6時

・参加費300円

・定員20人(申込み先着順)

だ」という考えであった。

かのぼることが出来る。運動の理論は、60年に「平凡人の教育・平凡人の文章」としてまとめられ、刊行された。しかし、ふだん記運動が本格的に展開し始めるのは、68年「ふだんぎ」創刊号が発行されてからである。その後は個人文集の発行がつづき、70年には、色川大吉氏によって朝日新聞夕刊コラム「標的」で、個人文集「つん留」の話が紹介されるまでになった。2020年時点では15グループが活動し、それぞれ機関誌を発刊している。

□ 記録の人

運動の根拠は「言葉が万人の道具であると全く同様に、文章も、教育が普及した現在では、万人の道具なのである。どんなに

また運動の方針は「どう書くか」ではない。「何を書くか」が問題である。有るか無いかの問題である。一般は「何を書くか」が問題である。書くべきであったことは、何でも書けばよい。まねなぞするな」というものであった。そうした考えの基には、橋本義夫の「地方文化の貧困は、記録や文の少ないことである」「地方は劣等感の中に埋まっている」という判断があった。

橋本義夫の根拠には「何(役)

にもならず 無所有で生きよう」と考えた、若い日の理想が息づいていた。死の数日前まで書きつづけた『老枯日記』には、その精神が貫かれている。

(記・鈴木清隆＝共同代表)



橋本義夫の足跡を訪ねる

が、そこに至るまでには、橋本自身も苦悶の中で記録を書きためていた。簡易な冊子の形で後世に残ったものも含めると100冊以上ある。これに限らず、メモ、手帳など書き込んだ紙片もごまんと残されている。まさに記録の人といえる。

□八王子市中央図書館

こうした彼の記録の中でも、発行された書籍やふだん記にまつわる本の数々が所蔵されている八王子市中央

図書館の会議室にて、まずは橋本義夫がどのような人物なのか、増沢からは自身が編集にかかわるフリーペーパー『はちとび』を元に紹介。鈴木清隆からは午後のフィールドワークで訪問する元八王子地域のこゝと、橋本義夫の思想の変遷などが語られた。

また、橋本の蔵書がふだんにある図書館の好条件を活かして、館内の閲覧資料の一部を会議室に運んでもらい、実際に彼の書籍を参加者で閲覧していった。橋本を知る方、ふだん記にかかわる方、まったく情報を知らない方など、多様な参加者であったが、質問も活発にな

され、熱心に彼の著作に目を通していった。レクチャー終了後には自由に館内を見学する時間を設け、各々橋本の著作、ふだん記関連書籍、市民活動資料などを閲覧していた。

□平井鉄太郎「図書塚」

午後は市内元八王子地域のフィールドワークを行った。幸いよく晴れて暖かな絶好のウォーキング日和の中、バスで現地向かった。

まずは橋本の建立した「図書塚」をスタート地点とした。私設図書館建設を目指して膨大な書籍を所蔵していた地域の小学校長、平井鉄太郎。彼が集めた蔵書は1945年8月2日未明の八王子空襲によって灰燼に帰してしまった。それ



を悼んで建てられた碑は、本の形をした、ユニークなつくりをしている。現在、敷地は図書塚公園として整備されている。

□自由民権運動「先覚之碑」

陣馬街道を少し

歩き、次に見学したのは「先覚之碑」である。明治期に自由民権運動が盛んだったこの地で、地域の近代化に寄与した8名の先覚者を讃えて建てられた。町会会館の一角にあるこの碑は、実業家、政治家、活動家など、実力者を顕彰したものであり、とても立派なつくりをしている。明治期の自由民権運動の流れなどに触れつつ、当地の近代化発展の理由などが解説された。

□カトリック泉町教会

先覚之碑のすぐ近くには、こうした近代化に寄与したカトリック泉町教会（八王子の分教会）があった。この日は教会の配慮により特別に内部も公開していただくという貴重な機会を得ることとなった。同教会の伊藤弘一さん、岡村佐知子さんから教会の説明がなされ、改修、立て替えはあったも



の、明治期より続く教会の雰囲気は十二分に味わった。隣接した事務所には、かつての教会の写真も飾られ、畳敷きであった昔の風景、前出の先覚者と交流があった神父の肖像写真、フランス人宣教師テストビッドなどが入村した時の届書（1878年）なども見せていただき、近くにある墓地も見学した。

八王子の一運動家、橋本義夫の足跡を辿り、彼が元八王子地域で建立した石碑を巡ることに主眼を置いた企画ではあったが、1日を通して紙による記録、石による記録、さまざまな形の地域の記録を体感することができた。橋本の残した記録は、図書館や石碑といった形で数十年を経た現在も残り、今も変わらず私たちの目の前にある。改めて記録の持つ力強さを感じる機会となった。

（増沢航Ⅱ 共同代表）

知ってもらいたい、養育家庭のこと

後藤多美子（武蔵村山市）

□市民アーカイブ多摩との関わり

私は1991年、養育家庭として6歳の男の子を委託され、18歳まで預かりました。

小学生の時、その子は保護者の私たちと名字が違っていると言われたことで、学校に行かなくなっていました。そこで私は、「なぜ名字が違っているのか?」「名字ってなんだろう?」「夫婦別姓になったら子どもの名字は?」と問う紙芝居を作り、子どもの学校で披露させてもらいました。その後、知人に曲を作ってもらい、私が歌詞を付けて歌う公演活動も始め、そこで知り合った方に向けた通信を不定期に発行し、郵送するようになりました。

93年に創刊した『ファミリー通信』は98年まで発行、95年からは『文化通信マザーテレサ』、2000年1月からは『文化通信フォスターペアレント』(37号)と改称して、15年の100号まで発行しました。市民アーカイブ多摩には51(02年8月)〜100号まで、それ以前の号は法政大学環境アーカイブズに保存されています。

14年、私の住む団地から自転車20分ほどの場所に、市民アーカイブ多摩が開館しました。雑木林に溶け込んだ平屋で、資料を保管し、閲覧しやすいよう改修を終えると、明るく素敵な部屋になりました。お客様を迎えやすくなり、私もパソコンへの打ち込み作業など少しお手伝いしました。あまりのたくさんさんの印刷物に囲まれ、私もどう扱っていいかわからず、もうイヤだと思う時や本当に保管が必要なの? と悩んだ時もありましたが、スタッフの方々とわいわいがやがや言いながらの作業は楽しかったです。



□里親制度啓発のために

17年8月、厚生労働省は社会的養護の将来像を示す「新しい社会的養育ビジョン」を発表しました。今後7年以内に6歳以下の未就学児の75%を里親委託にし、特別養子縁組の成立件数を5年間で2倍にするなどの数値目標を打ち出しました。

□出会いを重ねて

プホームを開設しました。私は養育家庭も増やさなければと18年4月から毎月1回、市内公共施設前で「里親制度啓発キャンペーン」ののぼり旗と赤ちゃん人形を持って立っています。21年4月からは総合センターの調理室が無料で借りられるようになり、「知って下さい 里親制度」絵本・紙芝居・こりんカフェも開催しています。市報にも毎月案内を掲載してもらっています。

『ようこそ! 市民アーカイブ多摩へ』の発行で、会に寄付してくださった林治代さんが亡くなった知らせを聞き、大変ショックでした。何とか気持ちを落ちつかせたいと思い、市民アーカイブ多摩に何回か行き、目高舎文集『ひこばえ』の中の治代さんの文を読み続けました。その中に、治代さんが

市民アーカイブ多摩の四季⑩

春 モモ

春先から年末まで、草取りや落ち葉掃きなどの作業に追われますが、冬の間はほっと一息。果樹の花の可愛らしさに誘われ、今年の作業も始まります。

春になると次々に咲き出すバラ科の樹木にはウメ、アンズ、サクラ、カイドウ、モモ、スモモ、ナシ、リンゴなどがあり、果樹として利用されるものが大半です。季節の進みが緩やかな時は順繰りに咲きますが、春が遅くて急に暖かくな



た年にはいつぱんに咲くこともあり、その中でモモは、花が桃色であるばかりでなく、太い枝に沿って蕾が2個ずつ付き、その間の葉芽が花と同時に開きはじめるという特徴があります。中国西域の原産と言われますが、弥生時代〜古墳時代の遺跡からは核(実の中の硬い部分)が大量に出土しています。また、人里離れた深い山の、他の木が生えにくいような急斜面に自生状態で見つかることがあります。桃源郷とはそのような場所であり、そこから桃が流れて来て桃太郎が生まれたという空想はどうでしょうか。

(邑田仁・むらたじん)
元東大小石川植物園園長

金子みすゞになつて書いた詩「明日からどこで」を見つけ、感激しました。この詩を歌ってみたいと思い、曲を付けてもらい、レッスンを受け、歌って楽しんでいきます。治代さんも喜んで聞いているかしら。

また、知人が自治会の中に福祉プロジェクトを立ち上げ、広報誌『さくら』を発行しました。私も意見して作り上げ

ので、アーカイブの方に見せたところ「ぜひ、アーカイブに每号入れてください」とメールがありました。市民アーカイブの視点から見ると、作った本人や、関係者には気づかない何か、まだまだそこかしこにあるのかもしいないと思えました。それを探すのも市民アーカイブの楽しみなのでしょう。(ことう・たみこ 会員)

「ミニコミの魅力伝える」 目録づくりアンケート実施

2020年3月に作成した『ようこそ！ 市民アーカイブ多摩へ』は、これまでの当会の歴史を振り返ることをメインにしつつ、巻末に分類別のミニコミ一覧を掲載しました。

この巻末のミニコミ一覧が好評だったことと、市民アーカイブ多摩開館から8年が経過し、収集・整理・保存活動が軌道にのったこともあり、より多くの多彩な方に「活用」していただくための新たな冊子づくりに向け

て始動しました。まずは会員に、「ミニ

コミの魅力伝える目録づくりアンケート」を11～12月に実施し、28人の方からご回答いただきました。

その一部をご紹介します。

◆ミニコミの魅力伝えるために、どんな方法があると思いますか？（複数回答）

1. 詳細な目録一覧 18人
2. 1紙ずつ詳細紹介 13人
3. ネット上の検索 18人
4. 収集団体機関の紹介 13人
5. 分類整理方法等紹介 10人

◆自由記入（一部抜粋）

- ・1つずつ詳細に紹介して、活動や内容の面白さを知ってもらおう。
- ・選択の1～5が有機的につながるように。
- ・多摩地域の図書館や都立図書館、国会図書館のミニコミ所蔵リストと市民アーカイブ多摩の所蔵リストがあると各市町村でも収集が広がるのではないか。
- ・自分のミニコミを出して近所とつながることから。
- ・インターネット検索に詳しい人がいたらお願いすると良い。
- ・丸山尚さん著『ミニコミ戦後

史』の現代版を作りたい。
・ミニコミこそ真実をつたえるものです。

・ミニコミの研究誌的なものを企画してもよいかも？

・資料の「活用」という面に焦点を合わせるならば、冊子形式の目録よりも先に、資料室の利用しやすい観点も視野に入れて、所蔵資料を（できれば外部からも）検索しやすくする、蔵書管理システムをつくることといったことに、エネルギーを注ぎかけた方が良いのではないのでしょうか。こういうシステムを確立しておけば、所蔵一覧程度の情報内容のものであれば、最新のものを容易にプリントアウトして提供することが可能になるはず（場合によっては販売も）。もちろん、そうしたシステムを構築できるだけの人材なり、外部の協力機関等を確保できるか、助成を含め、資金確保の問題も出てくると思います。

・市民活動がより活発になることが、市民活動資料室の要だと思う。運動に没頭している時は横のつながりに目がいきませんが、過去と未来を意識し、縦にも横にもつながり、学び合える市民資料室の存在自体がミニコミの魅力を保っている。

岸中書庫報告③

□移送資料の再検討（11月）

市民アーカイブ多摩から10mしか離れていないとはいえ、岸中書庫に移送する資料について何度も検討しなおしました。なるべく雑誌タイプのバックナンバーに限定しましたが、現書架のスペースがあまり空きません。再度検討しなおし、ファイルが4冊以上、ボックスが3箱以上あるミニコミについて最新の3冊・2箱を残して移送することに決め、121タイトルを選び、緑色の丸シールを貼りました。

□資料移送②（12月）

2回目の資料移送を2日間に分けて実施・完了しました。岸中書庫には80cm幅の書架が23連（奥行17cm 2連、25cm 18連、34cm 3連）ありますが、9連がミニコミ等で埋まりました。

□現書架の資料移動（1月）

岸中書架への移送が完了したので、現在の市民アーカイブ多摩の書架を1番下の段を空けるべく移動。これまでかなりキツキツに入っていたのか、スペー



読者からの
おたより

● 催しに参加したいと思いつつ、なかなか行けないのですが、通信に丁寧な報告が掲載されていて嬉しいです。竹信さん、等さん、羽村さんの報告とても良かったです。出かけないともったいないと改めて思いました。（Fさん）

● 「資料棚から」を拝読しました。紹介されていた資料中で、『白子川源流通信』が気になりました。散歩コースです。（Hさん）

● いつも興味深いテーマのイベントや、充実した内容の通信に、企画力と継続力の強さを感じて感動しています。運営の方の熱い想いが伝わり、素敵なチームだなと思います。

● 通信で会員等も寄稿できるよう

になるといいなと思います。

● 精力的なご活動、通信より、いつも学ばせていただいています。ぜひとも学生を連れて見学したいと思っております。（Iさん）

● ここ数年で人権や環境問題については市民権を得て、誰でもが語れるテーマとなってきましたが、政治的な話や憲法の話はまだ気軽に会話できないのが悲しいところです。ざっくりばらんに、学校、会社、カフェ、飲み屋で、政治談議ができるような日本になってほしいです。（Hさん）

◆訂正とお詫び（23号8頁4段目）

誤 奥田さだ子さん
正 奥田さが子さん

▼お便りをお待ちしています。

アーカイブ多摩日記

◆2022年度会員継続・新規入会のお祝い

◆2022年度会員継続・新規入会のお祝い

4月から新年度が始まりました。22年度も引き続き会員継続をよろしくお祈りします。また、一緒に市民活動資料の収集・保存活動に会員として支えてくださる方を募集しています。※極力、窓口ではなく、ATMでの払い込みをお願いします。

◆当番連絡会議

1、2か月に1度、市民アーカイブ多摩の当番7人で会議を開催しています。開館日には2人ずつの当番が入っているので、日常運営の中での課題や共有事項などを話し合います。資料整理方法・手順の統一の重要性を認識しつつ、それぞれの個性による

資料の捉え方や利用者対応の違いなど、さまざまに「雑色的」に楽しめる会議にもなっています。

◆南多摩農村図書館から

2017年に開催した「現場を訪ねる」で訪問した私立南多摩農村図書館（1939、89年、浪江虔館長）から、朝日ジャーナル全巻の寄贈を受けました。岸中書庫に所蔵しています。

◆事務局移転します

「ネットワーク・市民アーカイブ」の事務局が3月上旬より以下の住所に引越、電話番号も変更になります。資料等送付先の変更をお願いします（市民アーカイブ多摩は変更ありません）。
旧 立川市錦町3の1の28の301
新 東村山市萩山町2の6の10
（〒189-0012）

運営委員会など

10月15日 第7回運営委員会、参加者6人。会員・カンパ者、当番確認、来館者報告、各部会からの報告（以下毎回）。運営委員会等資料記録方法検討、新目録づくりアンケート検討、次年度総会講師案。
11月19日 第8回運営委員会、参加者8人。現場を訪ねる確認、市民活動関連レファレンス図書、新規資料寄贈依頼、目録づくりを考えるシンポジウム、次期緑蔭トーク講師案他。
11月28日 第6回現場を訪ねる開催。参加者22人。
12月17日 第9回運営委員会、参加者8人。現場を訪ねる反省、次期緑蔭トーク講師検討、総会記念講演会内容等確認、会員アンケート報告、目録づくり他。
1月21日 第10回運営委員会、参加者7人。目録と検索を考えるシンポジウム当日分担、助成申請報告、今年度振り返りと次年度方針、体験ボランティア受け入れ、事務所移転について他。

会員数（2022年1月）

171（正会員63人
賛助会員104人・4団体）
◆新規入会ありがとうございました
賛助会員
向井雪子さん 横田順子さん

カンパありがとう

（2021年10月～22年1月）

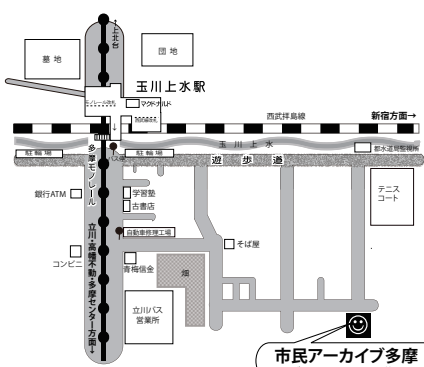
枝松 栄さん、奥田さが子さん
笠井牧子さん、北嶋 孝さん
倉元満子さん、斎藤康一さん
澤西義博さん、多田智子さん
麓 常夫さん、町村敬志さん

会員・参加者の声

・山手線駒込、六義園裏側に21年11月には新今井館（資料館も兼ねて）が開館いたしますので、おっいでにお出でください。
・2020年4月からの「社会的な大混乱（コロナ禍）」に関する三多摩の市民の動きについてとりあげてもらいたいと思います。
・以前から気になっていたのですが、「アーカイブ」という言葉には文法的に納得しがたく、出来れば「アーカイブズ」としていただけないでしょうか。
・ふだんあまり聞くことができないような内容、講師を選定した事業催しに感謝しています。
・社会をみつめる複眼をもたなければと思いました。もっと若い人に訴えたい。だまされている。

編集後記

巻頭の山本さんが書いてくださった「雑食的」は、当会の強みなのだとコロナ禍になって更に感じる。誰かが決めるのではなく、個々人が判断し、それぞれが行動する。統一的不是なのだけに、実は打たれ強いのかも。（佐・増・鈴・江）



【市民アーカイブ多摩利用案内】

- ・開館日：毎週水曜日、第2・4土曜日（8月中旬・年末年始の休館あり）
- ・開館時間：午後1時～4時 ・入館カンパ：100円～
- ・所在地：東京都立川市幸町5-96-7
（多摩モノレール、西武拝島線「玉川上水駅」南口徒歩8分）
- ・tel & fax：042-536-5535（電話は開館中のみ）
- ・見られる資料：2002年以降に市民活動団体や個人が発行するミニコミ（通信や会報など）1,900タイトルほか
- ・ホームページにミニコミのタイトル、発行団体を掲載しています。
www.c-archive.jp